

出帆した引揚船が、二十数隻も港内に停泊しているではないか。聞いたところでは、疑似コロナ患者が発生したので、海上封鎖の状態となり、検査の結果が出ないと上陸許可にならずに足留めされているのであった。

かくして、海上封鎖で二週間、さらに上陸後二週間引揚援護所に強制收容され、防疫上の諸検査を受けた後、ようやく無罪放免になって、懐かしい東京に戻れたのは五月二十九日であった。

顧みるに、二十四歳から二十九歳までの間、タイ・ビルマ・広東・マカオなどの各地での勤務を終えて、五年振りに引き揚げる事ができたことを、天に向かつて心から感謝を捧げる次第である。そのうえに、勤務先も幸いにして残存していたので、昭和二十一年六月四日から五年振りに元の職場に帰任できたことは、誠に有り難いことと感謝するほかない。

戦後、既に五十余年、まさしく時は光陰矢の如くに流れ去ってしまった。今日の世界、そして日本の諸般の情勢を静かに考えるときに、人類は二度と戦争とい

う悪行を繰り返すことなく、真の平和のもとに、許された歳月を感謝しつつ生きていきたいと念ずるや、誠に切なるものがある。

マライにおける終戦前後の苦闘

神奈川県 佐々木 輝 久

一 マライ移住の動機

私は、昭和十八（一九四三）年七月十一日をもって陸軍のマライ軍政監部付を命ぜられた。職務はマライ地区における文教行政に任ずることであった。（戦時中、日本はマレーをマライと公称していたので、固有名詞についてはマライと記述する）

昭和十八年八月三十一日、輸送船で九州の門司港を出港した。当時、日本軍の南方戦線における戦況は、緒戦の戦果の勢いがまだまだ残っていて大きな変化もなく、日本近海の制海・制空権は我が方にあったので、台湾、ベトナム、サイゴンなどを經由して航海を

続け、十月十五日に無事シンガポール港（当時は昭南港と言っていた）に入港した。上陸後、直ちに所属する陸軍マライ軍政監部総務部文教科に着任した。

そこで与えられた最初の主任務は、華僑（中国以外の地で定住している中国人）のための中国語による教科書を編集・作成することと、同じく華僑に対しての師範学校教育を実施することであった。

着任後、当分の間は、シンガポール市内のアップパーセラン・ロードにあつた宿舎に居住して、毎日、軍政監部に通い任務を遂行していたが、師範学校教育が軌道に乗り始めたのに従って、昭和十九年四月一日より、セラングール州カジャンにあつたマライ上級師範学校の教官宿舎に移り住み、師範教育に専念していたが、昭和二十年一月一日より華僑対策と調査報道の任務も兼ねることとなり、北部マライのペラ州タイピン市の軍政監部の本部に移った。

終戦までそこを拠点として、任務にまい進していたが、敗戦となってジョホール州レンガムに移り、さらにシンガポールに戻ってリバーバレーキャンプの収容

所に入れられた。その後、作業隊通訳として、あちらこちらに派遣されて帰国したが、幸いに一般邦人とは異なり、レンバン島の収容所には行かなかつた。

収容所では主として連合軍との折衝役となり、通訳として日本軍将兵の保護の任に従事した。

二 終戦までの一般状況

昭和二十年七月ごろの南方戦線の日本軍は、フィリピンやビルマでの防衛線が、米・英・印の連合軍の猛反攻で総崩れになり、制空権、制海権はもとより連合軍の手に渡り、日本内地との連絡、交通路は完全に崩れて、回復はほとんど絶望的な状態となっていた。

一方、連合軍側は欧州における独・伊との戦いに、逐次形勢を有利に過ごし、昭和二十年五月にはついにナチスドイツも無条件降伏をした。欧州での勝利を得た米・英軍に加えてソ連軍も対日戦争に全力を注ぐこととなり、主攻をマライ方面に指向し二百万の大軍をもって進攻作戦を行う計画を立てていた。これに対して日本軍の兵力は、その二・三割の数しかなく、装備は劣悪で、しかも弾薬、食糧、燃料などの戦力の補給

も思うようにまかせず、劣勢ばん回はほとんど不可能の状態となっていた。

南方作戦においても、緒戦において折角手に入れたシンガポール、マライ半島も手放さざるを得なくなり、マライ半島中央山地に最後の拠点を設置することになり、その準備に追われることとなった。

私たちの所属していたマライ軍政監部においては、開戦以来、戦力の維持増強のために大切な南方資源の取得、日本への供給に全力を尽くしていた。

大量の生ゴム、ボーキサイト、錫、それに砂糖などの食糧品等を送り込み、与えられた任務の達成のために死力を尽くしていた。

三 マライの危機

第一次世界大戦以後、南方進出した日本の企業は、日本に不足する資源の開発供給に営々とした努力を重ねていたが、その反面、南方資源地帯営為の代価として人心崩壊の危機にさらされていた。

マライ軍政監部としては、いろいろな問題を抱えていたが、特に人心崩壊の回復ということについては、

その対応が緊急のこととされていた。

対応策の第一は、食糧の確保である。マライ半島の原住民の主食は米であるが、その米はタイ・ベトナムから年間六十万トンを買っているため、その確保は絶対に必要なことであり大きな問題でもあった。米の不足は代用食のタビオカ、ラギー（粟の一種）、イモ、砂糖で補っていたが、それらも周辺の各地とマライ半島自体で生産しなければならなかった。

この生産を何とか軌道に乗せることが、軍政監部の当面している大きな事業であった。このため、軍政監部の職員をタイ・ベトナムに派遣して、所要量を取得しそれを輸送するための船舶及び貨車を確保し、さらには、確保した輸送手段をもって連合軍の空爆を避けながら決死的な行動で運搬し、どうにか所要量を充足して原住民の信頼を回復していた。このことは、敗戦後になっても原住民が非常に感謝していたという証言があった。

次に問題となっていたのが、治安の維持確保であった。戦争開始時より華僑による抗日人民軍八個大隊

が、ひそかに連合軍から多量の武器、弾薬などの供給を受けて武装をし、日本軍に対してゲリラ行動を行っていた。軍政監部の出先でも諸所で抵抗を受けていた。

行政官も必死になってこの種の問題解消に努力していたが、彼らの勢力は逐次大きくなってきて治安崩壊の危機をもたらししていた。この問題は長い目で見てみると、マライ半島における華僑による独立運動でもあったと思うし、日本の敗戦後に十年近く続けられていた反英運動に連接するものでもあった。

当時、わずか二十六歳の若僧であった私に対して、この華僑対策の担当官という重大にかつ責任のある仕事を命じたのはどうしてかと考えてみると、私が満州奉天中学校の卒業生であり、さらに大阪外国語学校で中国語を専修したという学歴と、マライ上級師範学校の教官としてマライ華僑の中核となる人たちの教育を担当していることからであろうと思う。直接的には文教科長の推薦でこの難しい職務に充用されたのである。

マライ半島に所在する華僑に対するこれまでの日本当局及び日本人の扱い方は、必ずしも適切であったとはいえない状態であった。日中戦争以来、華僑の中国側に対する戦費調達や、中国本国における作戦の補助的行為については、日本の目をかすめては大々的に実施されていた。これらの行為についての実情の調査研究を行ったが、在マライ半島の華僑のとった抗日行為の中でも、特に日本企業への商品ボイコットは多大な苦闘を強いたものであった。

私は早々、当時華僑研究についての第一人者であった矢内原東大教授や浅香大阪商大教授の研究論文について調べたり、華僑の著作から資料を集めて研究をして、その成果を大至急とりまとめ、開戦以来行ってきた華僑に対する強圧と、マライ人、インド人に対する差別待遇を改めて、融和政策を採用するように進言し、当時のマライ軍政監部の梅津総務部長の決裁を受けて、管下の州、市長に指令し、抗日人民軍との抗争を和らげることに努力した。

この融和対策が功を奏して、終戦まで華僑とのトラ

ブルは随分と減少した。

四 終戦への胎動

マライ軍政監部のスタッフは、一部の軍人を除き内地の各中央官公庁、台湾総督府及び満州国政府よりの出向者の精鋭を中心として組織されており、植民地政策に対する造詣の深い実務経験者が多く集まっていた。私が、第一次世界大戦における敗戦国ドイツの賠償問題、ドーズ案などについての助言を求めると、まだ日本は敗れていないのに、日本が敗戦国となった場合にはと、それらの問題についても十分に考慮するよう、非公式の場とはいえ年若い私たちに対し敗戦時の問題を答えてくれた。

昭和二十年の六月上旬、私が立案した「終戦時における軍政監部としての処理要領（試案）」は、軍政監部からは否決されたが、厳しいしつ責はなかった。総務部長の梅津少将は、その試案が取り上げられなかったことに、「おかしいな？」と言われて、私に慰めの言葉をかけてくださった。

七月中旬になると、ポツダム宣言が連合軍側からの

ニュースで知らされ、いよいよ事態は最終のところまで来たという状況になり、私のいた調査・報道室は、がぜん多忙となってきた。東京からの報道、特に同盟通信社の報道は早く、私たちの調査・報道室にも、「萬世に対し泰平を開かんとす」という言葉が流れてきた。

戦意高揚に努めている一方で、こんなことが流れるということはちょっとおかしいなと思っていたが、間もなく連合国側から我が国に対してポツダム宣言が伝えられた。

八月上旬の広島市への原子爆弾（当時は新型爆弾と言われていた）投下、これに対し日本政府は戦争継続の意思を表明。「一億玉碎するまで戦う」という決意を国の内外に向けて表明した。これに対して連合国側は無条件降伏でなければ受け入れられないとばかりに、八月九日には長崎市に二発目の原爆投下を行った。ついに八月十五日に、日本政府はポツダム宣言を無条件で受諾した。

南方軍参謀長よりの「休戦の訓示」を八月十五日の

午後を受け、北部マライのタイピン市に進出していたマライ派遣軍は、九月二日の東京湾における米戦艦「ミズーリ号」艦上における降伏調印に基づいて、マライ半島における軍政の廃止、即占領地を解放するという軍司令官布告の趣旨を、至急管下州市長あてに伝えるようにと、軍司令部から私あてに指示があった。

私は、涙を流している間もなくこの趣旨に基づいて、わずか二時間で五条にわたる布告文を書き上げて決裁を受けた。

その内容は、

- 一、戦争は終わった。
- 二、マライの住民には、迷惑をかけた。
- 三、これからは、共に協力して新しい世界をつくらう。

というごく簡単なものであった。後日、賠償問題等が起きたときに、この布告文が問題となるようなことのないようにと、余計な言葉は一切避けておいた。

この布告文は、中国語と英語の二カ国語によって作成したが、抗日人民軍にも届いた模様で、彼らがジャ

ングル内で開いていた人民大会も平穩に推移していたようであった。私たち渉外要員が、終戦処理のためにマライ地区を東奔西走したが、彼らは私たちに危害を加えることもせずに、何らのトラブルも発生しなかった。私の身辺も、戦中よりも戦後の方が安全だったことをつくづく思い出している。

当時、一番心配したことは、連合国側が日本側に対して、どのような接し方をしてくるのかということであった。事実、連合国側は九月二日以降においても、シンガポール、マラッカ、モリブ、並びにペナン等の要地においては、戦闘態勢をとったまま進駐をしきつた。

軍政監部より、これらの要地には渉外要員を派遣して、不必要な紛争が起きないように対処した。

特にマラッカ州政庁は、進駐する連合国側の部隊に對しての歓迎の宴まで準備をしていたようだったが、連合国側はこれに對して一顧だにせず、無視した。平和進駐とはいえ当然のことであらう。

各地区の日本軍と一般邦人は、自主的に抑留地帯を

設定していた。例えば、マライ北部ではサラクノースのゴム林地帯に数万人が、シンガポール地区ではジョホール州のレンガムに南マライ軍司令部（戦時中の南方軍総司令部）及びマライ派遣軍（第二十九軍）などの軍主力が、また、同じシンガポールのジュロン地区には在留邦人がそれぞれ集結抑留されていた。そしてそれぞれが英軍司令部（SEAC）と抑留生活等について交渉を行っていた。

私は、軍政監部よりレンガムの第二十九軍司令部に連絡員として派遣され、軍司令部の部員と一緒に、設営業務や復員計画に基づき、レンバン島から日本に復員する部隊の輸送、梯団編成などの業務に任ずることとなった。しかし、南マライ軍司令部の計画によれば、完全復員までにはこれから先約三年を必要とするとのことであった。その原因は輸送船舶の不足であり、この解決はいかんともしようがなかった。

後になって、旧日本海軍の軍艦や米軍供与のLST艦が配船されることとなり、昭和二十一年の夏ごろから輸送可能となって、復員計画が繰り上げられて実行

され、これによって著しく促進されることとなった。

復員輸送における乗船順位は、非戦闘員であった在留邦人、特に婦女子と子供たち、それから女子軍属、次いで南方航空部、軍政監部、各州市政庁職員等の優先順位で選択した。その他、英軍の認めた日本人と婚姻関係にある現地人のうち、日本に行くことを希望する女性も含めることとした。ただ、これらの女性は、引揚船に乗るまでは日本人の経営する病院、または各地にある陸軍病院の看護婦として働くことを条件とした。これは、英軍占領軍の兵隊たちとの無用の摩擦を避けるための手段であって、このために全然といってもよいほどトラブルは生じなかった。このことにより、伝えられる満州・朝鮮における引揚げ時の惨事のような深刻な事態は発生することがなく、全員無事に日本に送還することができた。

英軍の進駐と同時に、私は第二十九軍司令部の渉外部員を命ぜられ、英語の通訳に任じた。先ず最初の仕事は、英軍北マライ地区司令部に文書使として行くことで、単独で白旗を揚げながら司令部を出発した。何

といっても白旗を持つての文書使の仕事は初めてのことであり、心細いことであった。途中、何事もなく英軍キャンプに到着したが、正門前で一個小隊ほどの兵隊に銃を突き付けられたことには冷や汗を流したが、敗戦の実態をひしひしと身を感じたものだった。そのことは今になっても鮮烈に思い出される。

そのキャンプの英軍隊長に連れられて、クアラカンサーの英軍司令部に行き、そこで降伏に関する文書を受け取って再びジープで送られて、司令部に無事に戻った。

司令部のみんなは、無事に戻ったことについて喜んでくれた。英軍司令部での様子をみんなに話したが、三時のティータイムに英軍の従兵がコーヒーを持ってきてくれたことを話したら、みんなは、本当にびっくりしていた。この話によりみんなは英軍の出力を知ることができて、これからの先行きのことについて大いに安心をしたとのことであった。

十二月上旬になって、軍政監部より私と東京商大出身の古賀君の二人がシンガポール抑留所派遣通訳に選

ばれて、抑留所と連合国側との渉外業務に任じた。ただ、この通訳の人選にあたっては、私たちよりも教段と語学力に優れている中老年の人たちが派遣通訳に選ばれることにしりごみをして、若い者にお鉢が回ってきたようであった。

その間に、内政科長から「連合国側の指示で、在留邦人も、日本軍と同様にどんな理由にせよ残留することとは許可されないこととなった。一人残らず日本に引き揚げるように、君たちは手分けをして在留邦人の説得にあたってくれ」と命令された。

要するにこれまでの私たちの仕事は、現地の人たちに対する行政であったが、いまや主客転倒して日本国内と同じような立場での行政に任じているのだということ、身をもって知らされることとなったのである。

五 終戦時までの日本企業の活動

当時、マライ半島及びシンガポール地区で活動していた邦人企業は、主なるものだけでも百社以上もあった。満州事変から引き続いた支那事変、この間におけ

る日本軍の活躍で、日本の力は日の出の勢いであった。華僑による排日・抗日の行為もだんだんと活発になってきたが、それでもまだまだ活動の範囲は拡大の方向にあった。

大東亜戦争開戦までは、英国政府も日英関係を考慮して、ある程度は時の勢いにまかせるかっこうになっていたが、開戦と同時に邦人企業の活動は、国策協力という大義名分のもとに一層活発化しきた。

日本が一番必要としていた鉄鉱石の採掘は、石原産業、飯塚鉄鉱、NKK、日鉄鉱業などの大手採掘企業が活躍していた。特に石原産業が戦前において日本に送り出した鉄鉱石は約二千万トン以上といわれており、第二位の飯塚鉄鉱が数百万トンという莫大なる採掘量であった。日鉄鉱業などは、マライ東海岸のテマングアンに近代的な本船直接積込みの設備を新設するなど、設備投資を活発に行っていた。

鉄鉱石に次いで、ゴム栽培であった。マライ中南部に広大な農園を保有し、米、英、蘭の各国に堂々と伍して栽培を行っていて、年間に約五万トンの生ゴム

を産出して、生ゴムの主要市場であるニューヨークとカロンドンの市場に輸出して、貴重なる外貨を獲得していたが、その主要企業は久原財閥系の三五公司、昭和ゴム、熱帯産業、三井農林等々の企業であった。これらの企業の資産は終戦時に全部、敵国資産として英国に没収されてしまった。戦後のことであるが、これらの企業が没収された在外資産は、すべて華僑系企業に再取得されて、例の朝鮮戦争による特需景気を招き、華僑財閥の肥大化をもたらした因となった。

戦争中において盛業を極めたのは前記の鉄鉱石、ゴムであったが、それとは別に木造船の造船業も随分と盛んであった。軍政監部としては、マライ半島周辺との物資交流を強化するために、海上輸送力の増強が必要であった。その手段としての木造船の建造促進は重要な施策で、クアンタンに四十四基の船台を設けて、八田造船、秋山造船などに命じて造船を行った。一時は、百隻以上の造船高に達したこともあった。

しかし、戦局の悪化に伴って、逐次船舶の喪失も増加し、一週間に約十万吨も失う悲惨な状況となつて

しまった。

また、物資流通については、軍政監部において戦中に「昭南物資配給組合」を設立し、物資の流通統制を行っていた。

その他あらゆる産業部門においても、内地の主要企業がマライ半島、シンガポール地区に進出して、南方における経済流通の中核的な立場を果たしていた。

六 シンガポール抑留所での活動

私は同僚の古賀君と二人で、昭和二十年十二月八日に、千人以上の将兵が收容されている「シンガポール抑留所」での作業隊付派遣通訳としての任務に服するため、ジョホール州のクルアン駅を出発した。

シンガポール北部の克蘭ジ駅に列車が到着したところ、作業隊員受け入れのための英軍の要員が約五十人待機していた。ものすごい見幕で我が作業隊に対し気合をかけてきたので、一瞬、両者の間に険悪な空気が流れたが、私は臨機応変に英軍側の指揮官と話し合っ、その場を収めてこと無きを得た。

抑留所における日本軍側の司令部は全く無能で、英

軍側と話し合いをすることも全然なく、作業隊の細部行動についてもすべて通訳である私に一任していた。そんな状況にあったので英軍側も気が立っていたのであろう。

しばらくして、シンガポール西方のリババレーキャンプに移ることとなり、作業隊員全員は、十数台の大型ローリー（トラック）に乗せられて移動したが、到着後すぐに、指示により二百人ごとの中隊編成をとった。

英軍側は、通訳の待遇については随分と気を遣っていたが、私はその好待遇を辞退して作業隊員と同じようにするように頼んだ。そのため私は、第八中隊の居住する隊舎でアンペラを敷いた床に寝起きをしていた。

中隊内で起居をしているうちに気が付き驚いたことだが、この第八中隊内には、軍政監部所属でベナン州、ペラ州の州政府に勤務していた人たちが百人余りもいて、一般の兵隊と同じような扱いをされていた。私が元々軍政監部本部の総務部員であったことを知っ

ている彼らは、英軍側との意思疎通役である私に対して一種の安心感を持ったようで、歓迎をしてくれた。

これらの人たちは大半は民間出身者で、軍政監部によって現地徴用されて各州庁で日本と現地住民との間において融和を図って働いていた人々であり、今の境遇には大いに同情をした。

しばらくして、マライ半島及びシンガポールからの引揚げが開始されて、その第一便が出発したことを風の便りで知った。軍政監部の本部員だった人たちが優先的に乗船したということを知り、第八中隊にいた両州政庁員であった人たちの怒りは頂点に達していたが、私が本部員の一人であり、本部から離れてこの作業隊にいて、おいてきぼりをくった形になっていたのでも、彼らは私に同情をしてくれた。「鬼界島の俊寛僧都」を想起したものである。

私は、作業隊員たちのために、英軍側に対して重労働を軽減することと、食事の質量をできるかぎり向上させることを強く要求して、作業隊員の保護と支援について努力を指向した。

作業はESBDと称して、建設資材の補給、倉庫作業などを中心に各種の部門別に分けられていた。私はこのうち、デポ業務の所に配置された。広大なヤードに鋼材、枕木、銅管、セメント、およびセメントパイプ、屋根材、丸太等あらゆる工兵用資材が山積みされているところで、これを伝票に従って配当区分する作業場であった。

千人の作業隊員を引率し、英軍側と仕事の割当配分を協議し、労働の質と量、特に重労働の軽減などについて、昼夜を分かたぬ交渉を行って神経をすり減らしていた。しかし、対応していた英軍は、幸いにもロイヤル・アーミーといってロンドン出身者で編成されている英軍の中でも指折りの伝統的な優秀部隊であることが分かった。当初の理不尽にして過酷な取り扱い、お互いの事情がよく分かり意思の疎通が図られて、紳士的な交渉をしているうちに緩和し、そのうちにお互いを理解し合うようになった。

しかし、給食事情だけは全般的に向上せず、逐次作業隊員の中にも栄養不足に起因する症状が表れてき

た。そのうちに炎天下における作業が続き、日射病にかかる隊員も増えてきた。さらにマラリア等の既往症の再発患者も出て、毎日平均して二十五人ぐらいの重症患者が発生した。マラリア患者も十人ぐらいずつ出たが、この悲惨な状況の改善について私は全力を尽くしたが、私一人の力ではどうにもならなかった。

私は、かつて内地を出発するとき携行してきた数種の子防葉のうち、アスピリンをポケットに入れて持ち歩いてきた。作業現場でスコールに遭って寒さに震えている兵隊に飲ませて手当てを行ったこともある。

重症患者については、英軍側に交渉してシンガポールにある日本人が経営していたタントクセン病院に入院する処置をとったが、英軍側は患者の容態を無視して、ただ、怠けていると一方的に判断して、なかなか承知をしてくれなかった。私は繰り返し繰り返し交渉を行い、誠意を尽くして英軍側の了解をとり入院の処置をとってもらった。

英軍側は、通訳の待遇については随分と気を遣ってくれて、一般の作業隊員とは著しい差別をしていた

が、私は極力、この待遇を辞退して作業隊員を大切に扱うように努めた。毎日午後三時にはティータイムとなっていて、私にも英軍側と同じようにコーヒーが出された。しかし私はこのコーヒーを飲んだふりをし、仮小屋（病室）に収容されている二十人余の患者のところを持っていき、患者に回し飲みさせた。病床で震えている作業隊員を見ていればとてもではなく、一人でコーヒーなど飲めるものではなかった。

これも同胞を救いたい一心からのことであつた。それにしても作業隊本部は、これらの患者救済に対して何らの有効な処置をとることもせず、いたずらに時を過ごしていた。

私は、この実情をシンガポールに残っている軍政監部の残留者に連絡をとって、「早期に対策をとってもらいたい、できれば次の帰国船に最優先で乗船させて一日でも早く内地に帰還させるように」という申し出をした。

しかし、私のこの努力も空しく何の対応もなかった。私が引き揚げてから大分たったころ、当時軍政監

部の指導的な立場におられた人にこのことを話したところ、「そんなことがあったのか、ちっとも知らなかった」と言われて、がっかりしたものである。

私は、英軍側との無用なトラブルを避けるために、毎朝、全作業隊員に対して次のようなことを要望していた。

(一) 作業中は、黙って働かずに声を出して働く。

(声が聞こえないと働いていないように、監視兵が思うから。)

(二) 労働力を少しでも節約するためには、ブルドーザーや、ショベルカーや、ジャッキなどの機械力を使う。

(三) 監視兵に誤解を受けるような行為はしない。

(四) 食べ物、缶詰などを盗むな。

(五) 逃亡行為をするな。時機が来たら帰国できるはずである。

(六) 病人、老人は、早期に申し出てくれ、相手と交渉をするから。

(七) 監視兵側にもノルマがあり、とても気にしてい

るのだから、何かあったら通訳に相談する。

(八) 夜間のセメント積み込み、鉄骨の積み上げなどのような苦しい作業も、輪番で協力してほしい。

などをお願いした。

しかし、私に対して反論する作業隊員もいた。それは、「通訳は労働をしないのか。不公平ではないか」ということであった。

英軍側は、「千人の作業隊員についての仕事をしているのだから、労働は免除しているのだ」と答えてくれた。だが、あんまりしつこく言うので、ある日鉄板輸送の作業に出たが、作業中に鉄板の下敷きになって、危うく右指三本を失うところだった。今でも電車をつり革につかまると指先に違和感を生ずるが、このときの後遺症である。

ある日、こんな出来事があった。

海軍出身の新入りの作業隊員が、私がそばにいるのも知らずに、「このキャンプにいる通訳に、神様みたいな人がいるそうだ」と、いううわさ話をしていた

が、それを聞くともなく聞いていたら、その神様みたいな通訳とは、どうも私のことのように面はゆい気持ちになってしまった。私が、誠心誠意、同胞である作業隊員の保護のために、英軍側と拮抗しながら折衝に当たっていることが理解されているようで、満足であった。

七 邦人企業に対する引揚げ促進

話が前後するが、軍政監部の内政科長から私に与えられた任務の一つに、邦人引揚げに対する説得ということがあったが、南方進出企業の人たちは、開戦前からマライ半島・シンガポールの各地で、それこそ営々として日本の国力増強のために働いていたが、大東亜戦争の開戦と同時に英国側から敵国人扱いを受けて、大部分の邦人は身柄を拘束されて、インド・ニューデリーの「赤い城（レッドフォート）」といわれた炎暑敵しいところに強制収容されてしまった。その数、約四千人ともいわれている。

昭和十七年の夏、アメリカの交換船でアフリカ東岸のロレンソ・マルケス経由でインドより送還された

が、商社員、プランテーション経営者、在外日本人学校教職員などは、本人の希望により再びマライ各地で下船して、以前の職業に復帰した人も少なくなかった。それこそ、マライに根をおろした人たちである。

敗戦により日本内地への引揚げを説得したが、ある人からは、「日本政府が勝手に戦争を引き起こしていて、今になって引き揚げてくれとは何事か。大正時代から血のにじむような努力を重ねて今日までやってきたのが、まったく水の泡となってしまった」とか、「どこに帰れと言うのか」「どのような補償をしてくれるのか」などと言われたが、まったく答える言葉がなかった。この敗戦下の状況では、何の対策もとることができずに専ら口で弁解し、頭を下げることにしかできなかった。このことは、私にとっても大変にショックなことであった。

半年後、その人と家族の一行が、それぞれリュックサックを一つ背負ってシンガポール抑留所で引揚げ船の便待ちをしているときに、そこで渉外通訳をしていた私は偶然に再会し、心から同情の言葉を申し述べた

が、今になってもそのときの様子を忘れることができない。

八 引揚げ後のこと

引き揚げてからしばらくたったあるとき、私は神戸の三宮駅で復員列車に乗っていた復員兵と偶然に話をする機会があったが、その人がシンガポールで同じキャンプに収容されていたということから、いろいろと話をした。その復員兵から、キャンプ生活について感謝しているという言葉を聞いて嬉しかった。

また、中学の一年先輩が、やはり当時の私の活動について、「君は立派だった。よくやっていたよ」と褒めてくれた。同じキャンプにいて、毎日私が朝礼のとき話をしていたのを聞いていたとのことであった。その言葉で、本当に当時の苦勞が報われた気持ちになった。

マライ半島・シンガポール島全体で、約三千人にも及ぶ方々の尊い命が失われたといわれるが、誠に痛ましいことであり、その方々のご冥福を心から祈るものである。

私は、マライ方面に出張のつど、在シンガポールの日本人墓地にある「留魂の碑」にお参りをして、二度とあの痛ましい戦争を起こすことなく、平和が続くように努力をすることをお誓い申している今日である。